

宗教学におけるマテリアルカルチャー研究

中村 祐希

1. はじめに一モノに着目した研究の広がり

近年、宗教の物質的・モノ的（マテリアル）な側面に着目することにより、人々の宗教的実践や慣習を具体的にとらえようとするアプローチが生まれてきている。このアプローチは現在欧米の宗教学で盛んになってきているものであり、ここには、教義や思想への着目が主流であったこれまでの欧米の宗教学の流れに対する批判として生まれてきたという背景がある。さらに、このようなアプローチは、広く近年の人文学研究における「生きられた経験」(lived experience) への注目⁽¹⁾と関連するものであり、人々によって実際に「生きられた宗教」(lived religion 「生活の中の宗教」とも)をとらえることを目指すものでもある。

本稿は、モノ⁽²⁾やそれらを取り巻く慣習の総体である「マテリアルカルチャー」という概念および、それと同様の視点で宗教の物質性を研究する際の「物質的宗教」(material religion) という概念の概要を述べ、これらの概念を用いた研究の事例を紹介し、この研究分野の可能性を示すことを目的とする。第2章では、マテリアルカルチャーおよび物質的宗教の定義とその登場の背景を述べる。第3章では、これらの分野の研究事例を紹介し、第4章では、これらの分野の先駆的学術誌 *Material Religion* の動向を概観する。第5章では、宗教学者の主導による日本におけるモノ研究の一例をマテリアルカルチャー研究と比較する。そして最後に、宗教学においてモノを研究する際の可能性と課題を示す。

2. マテリアルカルチャー研究／物質的宗教研究の定義と背景

2-1 マテリアルカルチャー／物質的宗教の定義

まず、マテリアルカルチャーがどのように定義されているかを述べる。宗教学研究のさまざまな方法論を解説する教科書 (*The Routledge Handbook of Research Methods in the Study of Religion*, 2011) では、リチャード・M・カーブ⁽³⁾によって次のように定義される。「知覚可能かつ文化的なあらゆるもの。モノそのものだけでなく、モノの周囲にあって影響し合うその使用と生産の文脈・過程・技術をも含む」⁽⁴⁾。カーブによると、マテリアルカルチャーを構成するものは広範囲におよぶ。例えば「目に見えないもの」もマテリアルカルチャーであるとされ、音楽や音を生み出す楽器や身体だけではなく音そのものや、ミサにおける聖体の味、お香の香り、指の中のロザリオの珠の感触、ある姿勢や身ぶり（膝をついて祈ること、十字を切ることなど）を行う時の身体の固有の感覚などもマテリアルカルチャーを構成するという。すなわちカーブの定義では、そのものは物質ではなくとも、物質から生じたことによって知覚できるものはマテリアルカルチャーを構成するのだといえる。

マテリアルカルチャーを研究する分野の定義は、同じくカーブによると、「マテリアルカルチャー

の複合的・身体的・知覚的・社会的・歴史的・物質的・技術的な次元に特別な関心をもつ、その学問的解釈のための学際的で多方法論的な新興の研究分野」⁽⁶⁾である。すなわち、物質としてのモノそのものを考察対象とするだけでなく、そのモノが使われる状況、文脈、過程にも注目する。例えば、護符や彫像などの宗教的なモノの研究自体は新しいものではない。しかし、それらを用いる慣習や使われる過程までもに着目している点がマテリアルカルチャー研究を特徴づけている。このようにマテリアルカルチャー研究はモノにまつわる広い側面を対象としており、これは宗教学においてのみ行われている研究ではない。マテリアルカルチャー研究は、考古学、歴史学、人類学、民俗学、科学史学、文化地理学、心理学、社会学などの分野でも行われており、これらの分野は互いに関連し合っている。フィールド調査やさまざまなメディア研究（文書、ビデオ、インターネット、映画）などもマテリアルカルチャー研究の方法である。

マテリアルカルチャー研究の意義について、カーブは次のような点を指摘している。マテリアルカルチャーは社会のあらゆる層の人々により生み出されているので、「マテリアルカルチャーと宗教」を研究することは、読み書きができなかった、文章を残せなかった、または残さなかった人々の間における宗教の研究も可能にする。これはつまり、歴史的に残されてきた資料は多くの時代と場所において、とくに男性のある種のエリートが生み出したものであることが多いのに対し、マテリアルカルチャー研究によって、これら歴史的資料に書かれていない人々の宗教的実践をも調べられることを意味する。

マテリアルカルチャー研究と同様の視点で物質的な面から宗教を研究しようとする研究者が、「物質的宗教」(material religion)という概念を用いて研究する例もある。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの人類学部教授であり、同研究・教育機関の宗教研究に関するプログラムにも関わるマシュー・エンゲルケ(Matthew Engelke)⁽⁶⁾は次のようにいう。「あらゆる宗教は物質的宗教である。あらゆる宗教は、その物質性の伝達手段との関連において理解されなければならない。これは必然的に、宗教的な物に関する、さらに日常のふるまいと言葉に関する考慮を含む。どんなに速く視界や音から消え去ったり空中へ消散したりしても、それらは物質的である」⁽⁷⁾。ここでエンゲルケは、カーブと同様に、モノとその周辺の状況に着目し、消えゆくものをも物質的としている。エンゲルケいわく「物質文化は、これまで一度も宗教研究に本当に不在であって来たことはない」⁽⁸⁾のだが、ここでは、これら宗教に不可欠な物質性を研究するための新たな枠組みとして「物質的宗教」という概念が用いられている。

物質的宗教研究においてエンゲルケが論じる問題の一つに、神の現前が物質を通じてどのように表象されるかという問題がある。エンゲルケが主張するのは、人々は物質に表されたものを通じて神の存在を感じるということ、そしてその表されたものは、それが表されるところの物質性に影響されるということである。例えばキリスト教における神の現前は、「イコンを見ること、聖像と聖遺物に触れること、ロザリオの珠を繰ること、聖書が声を出して読まれるのを聞くこと（または聖書を黙読すること）、聖霊に満たされることを含むキリスト教内の様々な方法で」⁽⁹⁾再・現前されているという。またエンゲルケは、「中間に立つもの」、すなわち目に見えるものと見えないものを仲介するものとして物質をとらえる研究によって、「主観／客観、精神／物質、超越／内在、伝統／現代性」⁽¹⁰⁾などの二項対立の「中間に立ち」、その図式を乗り越えることができる可能性を示唆する⁽¹¹⁾。

このように、カーブ、エンゲルケらが共通して注目しているのは、宗教にまつわるモノを、そのモノだけでなくそれらの用いられ方や日常生活との関連においてとらえることである。彼らの定義からは、マテリアルカルチャーと物質的宗教は同様の概念であると考えられるので、本稿では、宗教学以外でもより広く用いられるマテリアルカルチャーの語をおもに用いながら、これら宗教的なモノや宗教における物質性に関する研究の背景や事例を述べていく。

2-2 マテリアルカルチャー研究／物質的宗教研究の背景

マテリアルカルチャー研究という分野が宗教学において注目されるようになったのは、2000年代を迎えてからである。とくに欧米においては、従来の宗教研究はテキスト研究が主流であったが、そのようなテキスト研究を中心とした研究だけでは、宗教の物質的側面や、信仰者の実践や経験という重要な対象への考察が十分に及ばない可能性があるという問題意識が、研究者たちの間に表れてくる⁽¹²⁾。その流れの中で、2005年にアメリカにおいて、宗教の物質的側面に注目した研究を対象とした学術誌 *Material Religion* が宗教学者らにより創刊された。

一方日本の宗教学では、これまでもテキストによらない儀礼や教団、祭祀などの研究も欧米と比較して盛んであった。しかしこれまでの研究は、具体的なモノに焦点を当て、それらのモノを取り巻く慣習や環境、人との関わりを見るという切り口からなされた研究というよりも、儀礼や教団、祭祀などそのものに注目した研究が中心であった。近年の日本の人類学などでは、マテリアルカルチャー研究の視点を取り入れた研究も生まれてきている。例えば、国立民族学博物館の機関研究プロジェクト「マテリアリティの人間学」では、2009年から2012年にかけて「モノの崇拝—所有・収集・表象研究の新展開」と題する研究が行われていた⁽¹³⁾。宗教学においても2000年代になると、「マテリアルカルチャー」の語は用いられないながらも、モノを幅広くとらえ研究対象とする研究会の活動などが見られてきている。これについては第5章で述べる。

このような宗教研究が現れた背景には、前述のようなテキスト研究偏重への反省のほか、20世紀後半に宗教学・人類学において盛んだった記号論や象徴分析に対する反動もある。ただし、エンゲルケによれば、現象学、感覚の人類学、認知科学でさえもいろいろな点で、宗教を物質的と呼ばれうる何かとして形作ってきたのであり、記号論全盛期においてすら、必ずしも物質性が全く無視されていたわけではない。彼の指摘では、人類学者ウェブ・キーンが記号論的イデオロギーと呼ぶものに関する見解の中にも、宗教の物質性へのひとつの主要なアプローチがあるという。エンゲルケは、キーンの見解を次のように紹介する。キーンによれば、記号論的イデオロギーとは、(1) 物の種類、(2) 物が表すことができるもの、(3) 秩序があり階層づけられた体系の中で物が相互にどう関係しているか、についての前提である。エンゲルケによれば、キーンの記号論的分析において重要な点は「記号の形式が物質性を帯びることは逃れがたい」という点であり、キーンはある種の記号の物質的特性だけでなく、それらの具体的特徴の偶然性が、特定の記号が伝達するものにとっていかに主要であるかを強調しているという。宗教学者ロバート・A・オルシーのアメリカにおけるカトリック教会に関する研究⁽¹⁴⁾もまた、エンゲルケによれば、ある信仰において認められる物質性のレベルを設定するものが、時代によって変化するというを示す記号論的イデオロギーの問題を扱ったものといえる。

3. マテリアルカルチャー／物質的宗教の研究事例

3-1 ナンノ・マリナトスによるミノア文明の宗教の事例⁽¹⁵⁾

マテリアルカルチャー研究の例としてカーブが挙げるものには、次のナンノ・マリナトスによる研究がある。マリナトスは、著書『ミノアの宗教—儀式、イメージ、シンボル』(Nanno Marinatos, *Minoan Religion: Ritual, Image, and Symbol*, 1993) において、文字資料が残っていないミノア文明の宗教について研究している。

マリナトスの研究方法は次のようなものであった。まず、考古学により明らかになったマテリアルカルチャーのパターンによって特徴づけられる、ミノア文明の4つの時代区分における信仰の形態を説明する。さらに、ミノア人の「礼拝のための様々な設備」の形、機能、素材、可能性のある使われ方などを解き明かす。

これらに加え、建築学、比較、モノの綿密な調査、地理学的位置づけ、モノの加工プロセス、ミノア文明の宗教と考古学に関して現存する知識、人類学の理論などの様々な研究方法・知識・理論を用いて、マリナトスは次のようなことを主張した。(1) ミノア人の宗教は死者の崇拝に始まるという高い可能性があること、(2) 長年の問題であったミノア文明の宗教における神殿の場所について、宮殿が宗教的行為の中心施設であり、支配者が聖職者に等しかったという一つの答えを提示できること、(3) 支配層のエリートに共有され、多くの人々がその様子を眺めた「儀式的食事」が存在したこと、(4) 女性聖職者により具現化された、女神の啓示的出現に関する式典が存在したこと、などである。これは、解釈できるテキストがなく、今日実践者がいない宗教の信仰の実態や起源をマテリアルカルチャー研究によって明らかにした例である。

3-2 アマル・S・マルによる「コーラム」(砂絵)の事例⁽¹⁶⁾

さらにカーブは、マテリアルカルチャー研究の例として、研究対象への従来の解釈に対して新たな解釈を生み出したアマル・S・マルの研究を次のように紹介している。

マルの研究以前の1990年代に、人類学者のアルフレッド・ジェルは、南アジアで普及した女性による民族的芸術である、幸運を祈り不運を避けるための幾何学的で複雑な美しいデザインの砂絵「コーラム」(kolam)の意味を解釈していた。ジェルの解釈によれば、コーラムは解けない謎として示すことで悪魔を畏にかけるとされた。

これに対し、2000年代に入るとマルは、マテリアルカルチャー研究によってコーラムのもつ意味の新たな解釈を示した。マルは、女性たちがコーラムを作るのを観察し、作り手と話をし、コーラムが作られている間それを周囲で見ている人々と話し、作り手のためのガイドブックを読み、作り手のノート調べ、作り手がコーラムを作っている様子を録画し、その映像を調べるなどを行う。マルはこれらにより、コーラム(とくにカンピコーラム *kampi kolam*)は、謎によって悪魔を捕まえるものではなく、コーラムが結果として生ずるところの過程に悪魔を誘い込み、悪魔を迷宮のような網に絡ませてとらえるもの、と結論づけた。この研究は、モノを静的な完成品として見るだけではなく、その制作過程を観察することによって動的にとらえ、研究対象の意味の新たな解釈を試みた例である。

3-3 マシュー・エンゲルケによるジンバブエのアフリカ系教会「金曜日の使徒たち」(The Friday Apostolics)の事例⁽¹⁷⁾

エンゲルケがフィールドワークを行なったジンバブエの小さなアフリカ系教会「金曜日の使徒たち」の事例は、「非物質的に宗教的な」⁽¹⁸⁾プロテスタントの中でも、より非物質的であるとされる集団でさえも物質性を免れないことを示している。

エンゲルケいわく、「金曜日の使徒たち」の信者たちは「物質的宗教などないというキリスト教徒たちの集団」⁽¹⁹⁾である。すなわち彼らは、エンゲルケの「あらゆる宗教は物質的宗教である」という主張とは一見して対立する。信者たちは、「神の現前を「生に、直に」一聖霊に満たされた預言者の中に、讚美歌の中に、そして宗教の教義に従って生きることによって一感知する」⁽²⁰⁾ので聖書は必要でない、と主張する。また、彼らが聖書を拒絶した理由の一つは、文字の書かれた聖書は、支配層のヨーロッパ人側からの社会的コントロールの道具でもあるという点を見抜いたからでもあるという。簡素な白い衣服を身に着け、屋外で集い、祭壇を持たず、必要最低限の儀礼的生活によってその神学を補う信者たちは、他のプロテスタントの信者たちのように、神の現前のしるしは非物質的な性質によって定義されるものと理解する。

しかし、彼らにおいても物質性は避けられず、非物質性との関わりは何らかの具体的な物を通じて表されなければならないことをエンゲルケは指摘している。例えば、「金曜日の使徒たち」の中には預言者たちの存在があり、それらの者たちの中には、神の霊との直接で現在の接触という共同体の理想とは合わない、個人的な忠誠を要求し始める者がある。エンゲルケいわく、「主たる教義が精神の非物質性である宗教的集団の間でさえ、あらゆる宗教は物質的宗教なのである」⁽²¹⁾。

3-4 C・J・フラーによるヒンドゥー教寺院の修繕儀礼の事例⁽²²⁾

先の事例に続けてエンゲルケは、インドのマドゥライにあるミナクシ (Minaksi) 寺院での寺院修繕の完了を祝う、「じょうろ水浴びせ儀礼」と呼ばれる修繕儀礼の1995年の事例を、C・J・フラーの研究から紹介する。そしてエンゲルケはこれを、ヒンドゥー教において、神の現前への物質性の影響がさまざまに解釈される例であるとする。

この事例は次のように紹介される。寺院を修繕するにあたり、僧侶たちは、寺院にある像から神聖な力を取り出さなくてはならず、それらの力をじょうろの中に移した。そして修繕完了後に、そのじょうろにためた特別な水を寺院の塔の上から群衆に注ぎかけるのが「じょうろ水浴びせ儀礼」である。

この寺院修繕に関わった僧侶たちの間では、現前の問題の理解の仕方について見解が分かれた。この見解の違いは、神との関係において物質性と非物質性がどのように考えられるかについての理解の違いを示唆するとエンゲルケはいう。僧侶たちにおける第一の見解は、時間経過による像の劣化と汚れは、神の神聖な地位を損なうと主張する見解である。第二の見解は、神の力は「あらゆる物質的制限から独立して」存在するため、きちんと手入れされない像は、神を困らせるのではなくその像を世話する人間を困らせるだけであるという見解である。そして第三の見解は、遍在する神の現前はいろいろな神聖性の強さで存在するというアーガマ的な見解である。第一の見解においては神とモノの間に同一視がある。ここでの物質性は因果関係をもつ媒体であり、この見解では、現前は物質性にかかなり近く関連付けられている。一方、第二、第三の見解においては、物質性は媒体という役目に弱められている。

このように、神の力とそれを含む像は異ならない、すなわち、どんな像であっても神の力を等しく表すと考えるはずのヒンドゥー教であっても、物質性によって現前が影響されるという問題が存在しているとエンゲルケは主張する。

3-5 チャールズ・ハーシュキントによるイスラームの説教カセットテープの事例⁽²³⁾

宗教におけるメディアの役割に注目した研究の事例も挙げられる。エンゲルケは、人類学者チャールズ・ハーシュキントの『倫理的な音の風景—カセットテープ説教とイスラーム教徒の対抗的公共圏』(Charles Hirschkind, *The Ethical Soundscape: Cassette Sermons and Islamic Counterpublics*, 2006) を、注目すべき研究として挙げる。

ハーシュキントが明らかにしたことは次のようなものであるとされる。イスラームにおいては説教を聞くことが伝統的に重要視されており、それは道徳の教化の中心をなしている。小型で安く、簡単に量産できるカセットテープに録音された説教をさまざまな場所で繰り返し聞くことは、人々の道徳の教化を再構成しているという。

このように、マテリアルカルチャー研究は、様々な方法によって、モノや、それらが用いられ、実践され、変化する過程を動的にとらえる。これらの例で対象となった宗教現象は、テキスト研究などの従来の研究成果に加え、モノを動的にとらえる視点を加えることで、新たな解釈が与えられたものである。マテリアルカルチャー研究は、テキスト研究などの従来の研究成果を否定するのではなく、それらに加えモノに着目することで動的に全体をとらえ、宗教研究の新たな側面を開くものである。

4. 学術誌 *Material Religion* の動向

2005年にアメリカで創刊された *Material Religion* は、様々な時代・地域の宗教におけるマテリアルカルチャーに関する学術誌であり、この分野の先駆と位置づけられる。この学術誌の編集者の主張は、「テキスト研究は、モノ・空間・イメージや、すべての慣習の研究に結び付けられるべきである」⁽²⁴⁾ というものであり、「すべてのモノとそれらの使われ方は、生きられた宗教の例である」⁽²⁵⁾ とする。ここでは、美術史学において対象とするような歴史上重要とされる作品ではなく、無名の人々が作り出した大衆的なモノを研究対象とすることで、より人々の宗教的慣習をとらえることが意図されている。

Material Religion に掲載されている論文のこの10年間の傾向は次のようになっている⁽²⁶⁾。以下は、*Material Religion* の4人の編集者⁽²⁷⁾ S・ブレント・プレート、バーギット・メイヤー、デイヴィッド・モーガン、クリスピン・バインによる創刊10周年記念記事「*Material Religion* の10年」⁽²⁸⁾による。まず、分野別では20の研究分野から論文・記事が発表されており、それらの数は次のようになる。(1) 人類学 40, (2) 宗教学 31, (3) 博物館学芸員研究 (Museum curatorial) 15, (4) 美術史学 10, (5) 歴史学 8, (6) 考古学 6, (7) 社会学 6, (8) メディア学 4, (9) アジア学 3, (10) ユダヤ学 3, (11) 神学 3, (12) アフリカ学 2, (13) 建築史学 2, (14) 文化史学 2, (15) 演劇学 (Performance studies) 2, (16) ジェンダー学 1, (17) イスラーム学 1, (18) 文学 1, (19) 政治学

1, (20) 典礼学 1。このように多数の分野から論文・記事を発表し、その総数は 142 であるが、人類学、宗教学が合わせて 71 と半数を占める。

研究対象としている地域別では、論文・記事の数は次のようになる。(1) 北米 30, (2) ヨーロッパ 29, (3) アフリカ 20, (4) 小アジア, 南アジア, 東南アジア 17, (5) 明記されていない, 世界全体, 分散的 9, (6) カリブ海地域, 中央・南アメリカ 8, (7) 東アジア 8, (8) オセアニア, マレーシア, インドネシア, パプアニューギニア 4, (9) オーストラリア 1。このように、*Material Religion* における研究フィールドの幅や地理的範囲は全世界におよぶが、総数 126 のうち北米とヨーロッパが 59 と半数近くを占めている。これには投稿者が影響していると考えられ、アジア人、南アメリカ人、アフリカ人の研究者からの投稿は他の地域の研究者からより少ないという⁽²⁹⁾。

テーマに関しては次のようになる。そのバランスとしては、10 年間のうち、62 の論文・記事が現在的問題、65 の論文・記事が歴史的問題に関するテーマを扱っている。さらに、編集者の一人モーガンによると、この雑誌を創刊した時には、大衆的なモノではなく博物館に飾られるような美術品・欧米・キリスト教に関する研究が多いのでは、と編集者らは懸念していた。しかし実際には、イスラーム、仏教、キリスト教以外に関する欧米の現代的な問題、アフリカに関する研究など幅広い投稿が見られる。中国の宗教に関する研究も増えており、中世・古代に関する研究は今後の増加が期待される。一方少ない、または全くない研究は、北米先住民族の宗教・オセアニアの宗教・アジアの広範囲、のモノに関する研究であるという⁽³⁰⁾。また編集者は、専門用語ではなく分かりやすい用語を使うよう投稿者に求めている。それは、宗教研究に新たな視点を加えるために、専門家以外の読者をも想定し、彼らの意見とも関わろうとする同誌の姿勢の表れであろう。

5. 宗教学者の主導による日本におけるモノ研究

宗教学者の主導による日本におけるモノ研究の動向としては、雑誌『モノ学・感覚価値研究』（以下『モノ学』）の試みが挙げられる。これは、研究代表者鎌田東二の「モノ学・感覚価値研究会」（2006 年 5 月発足）による雑誌であり、「マテリアルカルチャー」という用語は用いられていないながらも、2005 年創刊の *Material Religion* と同時期に始まった日本におけるモノ研究の一例である。同研究会は、2007 年から 2016 年まで毎年 1 号（計 10 号）発行していた雑誌に加え、複数冊の書籍も出版している。

マテリアルカルチャー研究と比較すると、『モノ学』の特徴が見えてくる。特徴の一つ目は、物質ではない「もの」にも注目するということである。つまり『モノ学』は、二元論によって「精神」と「物質」を分けたときの「物質」（＝モノ）だけではなく、「もののあはれ」や「もののけ」のような物質ではない「もの」にも注目し、これらを分けずに広く様々な「もの」や「モノ」を研究することを目的としている。これは、マテリアルカルチャー研究においてはモノを取り巻く慣習や実践に着目しながらも、考察の原点となるのはあくまで物質としてモノが存在している事実であることと対照的である。

特徴の二つ目は、様々な分野の専門家が研究に参加することである。「もののあはれ」「もののけ」から「ものづくり」「ものがたり」までを扱うため、『モノ学』の研究には研究者だけでなく宗教家、霊能者、アーティスト、工芸家、技術者も参加している。先に述べたように、*Material Religion* に

掲載されている論文・記事の執筆者はアカデミックかつ文系の研究者が大多数を占めているが、『モノ学』に参加している専門家はさまざまである。これには、発足時のモノ学・感覚価値研究会の拠点が京都造形芸術大学であったという背景も理由として考えられる。

特徴の三つ目は、『モノ学』の目的には、日本の文化・文明を評価する規範的意識があることである。鎌田は次のように述べる。

すべてを貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する中で、人間の持つ創造性とはいったい何か、日本の文化・文明に創造性の特色はあるのか、その特色があるとしたらそれは民族性を超えた世界普遍性を持ちうるものなのか、そして未来の文明に対してどのような寄与がそこからできるのかを探っていききたいのである。⁽³¹⁾

つまり、ここでは、日本的な「もの」や「モノ」を分析することを通じて「日本の文化・文明」のもつ普遍性を明らかにし、それを未来の文明へ貢献させる可能性を探ることが目的とされている。

モノ学・感覚価値研究会による研究には次のようなものがある。鎌田東二「日本神話における琴と言霊とシャーマニズム」⁽³²⁾は、日本、ヘブライ、ギリシャ、アイルランドなどにおいて神託（神の「言」葉）を請うときに用いる楽器として使用されてきたという琴に着目した研究である。鎌田は、日本の神話と儀礼を分析することで、琴は、「物」「霊（もの）」「者」と、「こと」「わざ」を媒介するものであり、人類のシャーマニズム技術は琴によって引き出されたという結論を導く。ここには、「物」「霊」「者」を分けて考えず、その上でそれらを結びつけるモノ（琴）に着目する視点がある。

また、島菌進「生きているモノの宗教学—アニミズムを開く愛・愛を身体化するモノ」⁽³³⁾は、故人の形見、愛車などの「モノにいのちがこもっているもの」⁽³⁴⁾を「生きているモノ」⁽³⁵⁾と定義し、これら生きているモノに注目する研究のもつ可能性を示唆する。島菌は、それら生きているモノをよく表す例として、ステイーブン・スピルバーグ監督のSF映画『A.I.』（2001年）の主人公ロボットが母親の代わりとして保持し続けるテディベアや、山本おさむの漫画『どんぐりの家』（1995年）に登場する知的障害をもつ少年が大切にしている石など、現代の映画や漫画の中からいくつかの事象を挙げて分析する。そして、これら生きているモノには「深い宗教性の基盤をなすものが潜んでいる」⁽³⁶⁾ことを主張する。

このように『モノ学』は、物質である「モノ」と非物質である「もの」を分けず等しく研究対象としている点、研究に参加する専門家の範囲、研究のもつ規範的意識がマテリアルカルチャー研究と異なる点になっている⁽³⁷⁾。

6. おわりに—モノを研究することの可能性と課題

本稿では、モノやそれらを取り巻く慣習の総体を対象とするマテリアルカルチャー研究および物質的宗教研究の概要を述べてきた。第2章から第4章で述べたように、これらの研究は2000年代以降欧米を中心に盛んになってきた分野であり、学術誌 *Material Religion* では10年以上研究が蓄積されてきている。この分野の特徴としては、モノを動的にとらえる点で従来のモノ研究と異なっ

ていること、新興の学際的な分野であること、統一的な研究方法はなくさまざまな研究方法によって研究される分野であることなどが挙げられる。

最後に、日本におけるモノ研究の課題に言及したい。本稿で述べたように、マテリアルカルチャー研究は、「目に見えないもの」も具体的な物質から生じ、五感がとらえることにおいてマテリアルカルチャーであると定義していると考えられる。エンゲルケは、モノへの注目は二項対立を乗り越える可能性があることを指摘しているが、彼らの研究には依然として物質の存在が原点に据え置かれており、二項対立の前提を完全には乗り越えていないともいえないだろうか。日本の研究者によるモノのとらえ方は、欧米発のマテリアルカルチャー研究に準じるものなのか、または新たな視点が示されてくるのか。日本の宗教学におけるモノ研究の中で、二項対立をどう扱うかという課題がまだ残されているのではないだろうか。

註

- (1) Matthew Engelke, "Material religion," in *The Cambridge Companion to Religious Studies*, ed. by Robert A. Orsi, (New York, Cambridge University Press, 2011), p.212.
- (2) 本稿では、ある具体的な物質を指す場合には基本的に「モノ」と表記する。ただし、それらにより広く指し「物質性」、「物質」などと表記する場合もある。
- (3) セント・メリーズ・カレッジ・オブ・カリフォルニアの学士課程の副学長。学際的な理論と方法論を用いて宗教、パフォーマンス、記号論、人類学、ヴィジュアルアートとデザインに関して研究している。著作には以下のようなものがある。「知覚とマテリアルカルチャー—歴史的・文化横断的視点」("Perception and material culture: Historical and cross-cultural perspectives," in *Historical Reflections/Réflexions Historiques* 23 (3), 1997, pp.269-300.), 「宗教とマテリアルカルチャーを教えること」("Teaching religion and material culture," in *Teaching Theology and Religion* 10 (1), 2007, pp.2-12.), 「見ることは信じることだが、触れることは真実」("Seeing is believing, but touching's the truth" in *Teaching Religion and Film*, ed. by G. J. Watkins, (New York, Oxford University Press, 2008), pp.177-188.)。
- (4) Richard M. Carp, "Material Culture," in *The Routledge Handbook of Research Methods in the Study of Religion*, ed. by M. Stausberg and S. Engler, (London, Routledge, 2011), p.489.
- (5) Ibid. p.489.
- (6) エンゲルケには次のような主著がある。『現前の問題—あるアフリカの教会の聖書の向こう』(*A problem of presence: Beyond scripture in an African church* (Berkeley, University of California Press, 2007))。本書は、2008年に宗教人類学会からクリフォード・ギアツ賞(Winner of the 2008 Clifford Geertz Prize from the Society for the Anthropology of Religion)を、2009年に民族誌へのヴィクター・ターナー賞(Winner of the 2009 Victor Turner Prize for Ethnographic Writing)を受賞している。その他には、『神の代理人—現代のイングランドにおける聖書の宣伝』(*God's Agents: Biblical Publicity in Contemporary England* (Berkeley, University of California Press, 2013))など。また学術誌 *Material Religion* にも

- 「棺の問題—英国ヒューマニスト協会の葬儀における死と物質性」(“The Coffin Question: Death and Materiality in Humanist Funerals,” in *Material Religion* 11 (1), 2015, pp.26-49.) が掲載されている。
- (7) Matthew Engelke, “Material religion,” p.209.
- (8) Ibid. p.210.
- (9) Ibid. p.213.
- (10) Ibid. p.212.
- (11) Ibid. p.228.
- (12) “Editorial statement,” in *Material Religion* 1 (1), 2005, p.6.
- (13) このプロジェクトは、1990年頃を境として欧米から始まった「モノと人間の相互作用を考える」視点に基づく「物質文化研究の現代版」であると定義されている。竹沢尚一郎「モノの崇拜の現在 機関研究「マテリアリティの人間学」領域 モノの崇拜：所有・収集・表象研究の新展開（2009-2012）」(『民博通信』130号，人間文化研究機構国立民族学博物館，2010年)，8-9頁。
- (14) Robert A. Orsi, *Between Heaven and Earth: The Religious Worlds People Make and the Scholars Who Study Them* (Princeton, Princeton University Press, 2005).
- (15) Richard M. Carp, “Material Culture,” pp.482-484. カープは、Nanno Marinatos, *Minoan Religion: Ritual, Image, and Symbol* (Columbia, University of South Carolina Press, 1993) に基づいて紹介している。
- (16) Richard M. Carp, “Material Culture,” pp.479-480. カープは、Amar S. Mall, “Structure, innovation and agency in pattern construction: the *Kolam* of Southern India,” in *Creativity and cultural improvisation*, ed. by E. Hallam and T. Ingold, (Oxford, Berg, 2007), pp.55-78. に基づいて紹介している。カープは、マルのこのようなアプローチを「行動的アプローチ」(behavioral approach) と定義し、このようなアプローチはマテリアルカルチャー研究における方法論の一つであると述べる。
- (17) Matthew Engelke, “Material religion,” pp.221-223.
- (18) Ibid. p.221.
- (19) Ibid. p.221.
- (20) Ibid. p.222.
- (21) Ibid. p.223.
- (22) Ibid. p.225-227. エンゲルケは、C. J. Fuller, “The renovation ritual in a south Indian temple: the 1995 kumbhabhiseka in the Minaksi temple, Madurai,” in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 67 (1), 2004, pp.40-63. を参照し、論じている。
- (23) Ibid. p.228. ハーシュキントの著作は以下のものである。Charles Hirschkind, *The Ethical Soundscape: Cassette Sermons and Islamic Counterpublics* (New York, Columbia University Press, 2006).
- (24) “Editorial statement,” p.6.
- (25) Ibid. p.7.

- (26) 以下で、分野別と地域別の数が合わないなど総計の区分によりその総数に違いがあるのは、一本の論文に複数の著者がいる場合があるためや、論文や記事の数え方に何らかの違いがあるためだと思われる。
- (27) S・ブレント・プレート (S. Brent Plate) は、*Material Religion* の共同創設者兼編集長であり、ニューヨークのハミルトン・カレッジの准教授。アメリカ人の人文学者。バーギット・メイヤー (Birgit Meyer) は、オランダのエトレヒト大学の教授。ドイツ人の人類学者。デイヴィッド・モーガン (David Morgan) は、アメリカのデューク大学の教授。アメリカ人の美術史家。クリスピン・パイン (Crispin Paine) は、博物館と文化遺産に関するコンサルタント。英国に拠点を置く。ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン考古学研究所の名誉講師であり、以前はオックスフォード大学の学芸員。イギリス人の博物館専門家。
- (28) Birgit Meyer, David Morgan, Crispin Paine, S. Brent Plate, "Material religion's first decade," in *Material Religion* 10 (1), 2014, pp.105-110.
- (29) 筆者が見た限りでは、タイトルに「日本」(Japan/Japanese) が含まれる研究は複数あるが、掲載された論文・記事の著者には日本人のように思われる名前の人物はいない (*Material Religion* 1 (1), 2005. から, 同 12 (4), 2016. まで)。
- (30) Birgit Meyer, David Morgan, Crispin Paine, S. Brent Plate, "Material religion's first decade," p.106.
- (31) 鎌田東二「モノ学の構築」(モノ学・感覚価値研究会編『モノ学』第1号, 京都造形芸術大学／モノ学・感覚価値研究会, 2009年), 3-4頁。
- (32) 鎌田東二「日本神話における琴と言霊とシャーマニズム」(鎌田東二編『モノ学・感覚価値論』晃洋書房, 2010年), 65-78頁。モノ学・感覚価値研究会国際シンポジウム(2010年1月23日, 於京都大学)における発表がもとになっている。
- (33) 島菌進「生きているモノの宗教学—アニミズムを開く愛・愛を身体化するモノ」(鎌田東二編『モノ学の冒険』創元社, 2009年), 121-135頁。島菌は、次のようにも述べる。「私たちは自分のまわりに「生きているモノ」の世界を作り、それを尊んでいると言える。私たちの文化はアニミスティックなものなので、そうしたことは特に不思議ではない。キリスト教徒やイスラム教徒に話すと、そうはいかないのではないか。このような問題も、モノ学のテーマの一部ではないかと考える」。同書, 122頁。
- (34) 同書, 121頁。
- (35) 同書, 121頁。
- (36) 同書, 134頁。
- (37) 鎌田は『モノ学・感覚価値論』のまえがきで、モノ学・感覚価値研究会の活動について次のように述べている。「わたしたちは繰り返し、日本語の「モノ」には①物質的次元, ②人間的次元, ③霊的次元がある, ということに注意を喚起してきたが、その三層一体的な非二元論的思考の持つ創造性や可能性をたくさんの研究者やアーティストとともに、さまざまな角度から問いかけ、探求し、表現してきたわけである」。鎌田東二「まえがき」(鎌田東二編『モノ学・感覚価値論』晃洋書房, 2010年), ii頁。